



私は四年目の医者。山梨県南部町に内科医として赴任して二年目です。

山梨県立中央病院で二年間、初期研修を行いました。一年半の間、さまざまな科で研修を行った後、最後の半年は私の志望する外科で研修しました。

内科医にとまどい

有意義な研修だった反面、知識や手技的な面で常に背伸びをし続けていました。そのため、精神的に疲れ、ほぼ毎日深夜まで勤務は続き、土日もなく、体力的にも追い詰められていました。

そのころ、南部町への派遣が決まりましたが、私は外科医として赴任するつもりでいたの

目標は外科医、その日を胸に

で、内科医として働くことになったとき正直戸惑いました。南部町に赴任してみても、生活は大きく変わりました。残業のない生活、土日の休みは確保され、夜間の呼び出しは月に一回程度、給料も上がりまし

ます。週に一回の往診日には、朝から風光明媚な南部町内を下

ライプしつつ、患者さんの生活の場所に入り込む感覚が新鮮でした。

しかし、私が診療所でのんびりと時間を過ごす間に、同期の外科医からどんどん差がつけられている気がします。ある同期の外科医は、早期胃がんの手術ができるようになった、と喜んでいました。外科医の技術として、すでに三年ほど差がつけられていると自覚しています。

特に、往診で何か問題が起きると、患者さんをはじめ家族や訪問看護師さんなどと、全員で問題に立ち向かう雰囲気を楽しく思えました。

責任感覚の芽生え

二週に一回、山奥のほとんど高齢者しか住まない集落への診療日には、不便な環境の中、力強く生活する高齢者にかえって勇気付けられたりもします。

研修医時代は、ただ与えられた仕事をこなすという感覚でしたが、診療所に赴任して、次第に自分の患者に責任を持つという感覚が芽生えてきました。

内科や整形外科で研修したとはいえ、南部で必要とされる知識は不十分で、必死で勉強もしました。はじめのうちはずいぶ

ん不適切な診療をしてきたと思えますが、一年もすれば90%程度の患者さんは、何も迷わずに診療することができるようになりました。

のんびりする間に

しかし、私が診療所でのんびりと時間を過ごす間に、同期の外科医からどんどん差がつけられている気がします。ある同期の外科医は、早期胃がんの手術ができるようになった、と喜んでいました。外科医の技術として、すでに三年ほど差がつけられていると自覚しています。

しかし、若くて体力も気力もあふれる今の時期。この時期に、相応の経験をつんでいないと、あとからでは追いつかないのでは。

そんな心配を打ち消せずに、一日一日が過ぎていきます。

(次回予定は青森県)

ほそかわ 細川

ひろし 洋

26期生・2003年卒



限界集落である佐野地区へ出張診療したとき、待合室で患者さんと撮影。患者と医師という間柄を越え、地域を維持していく仲間意識がわいてきます

南部町国保診療所

【私の勤務地】 南部町は山梨県の最南端に位置し、静岡県に接した県境の町である。町の中央に富士川が流れ、富士川に沿って集落が点在している。主な産業は林業、茶の栽培などであるが、高齢化が進み後継者の確保が課題である。静岡県内で働いたり買物したりする住民が多い。